

スウィフトの生涯 (XV)

「^{レギオン}軍 団クラブ」執筆から最後の遺書作成まで
(1736-1740)

三 浦 謙

1736年スウィフトは最後の長詩「^{レギオン}軍 団クラブ」を書いている。「^{レギオン}軍 団」とは新約聖書のルカ伝に出てくる悪魔に憑かれた無頼の呼び名である。ガリラヤ湖の南東ゲラサの町に住むこの男は身中に巣食う悪魔の軍団に苛まれ、たえず荒野に驅り立てられていた。鎖も足枷も厳しい監視もこの男を抑えることはできない。イエスは男の哀訴を受けいれ「^{レギオン}軍 団」の悪霊を豚の体中に移し替えて男を正気に戻してやる。

「^{レギオン}軍 団クラブ」では軍団のメンバーは悪霊ではなくアイルランドの国会議員である。彼らはスウィフトによってベドラムの精神病患者なみにあしらわれる。

トリニティ・カレッジと目と鼻の先にある

この大樓になにが納まっているのか。

脳味噌のない輩で

通称「^{レギオン}軍 団クラブ」といわれる

狂人集団である。

(9-12)

這って通れる程度の通路と

覗き穴のついた

独房にクラブの面々を

住まわせる

勅許がほしい。

(42-46)

この輩はいったん大樓に納まると、
 ピンと引き換えに国を売ったり
 座席で居眠りしながら
 法律作りに狂奔する。

.....

僧衣を見ると
 目をむいて怒号を発し顔をしかめる。

(47-56)

スウィフトにこの詩を書かせる契機になったのは1733年以降アイルランド国会が宗教界に与えた打撃である。前述の通り1733年にはリンネル業界振興のため亜麻と大麻にかかる十分の一税を恒久的に軽減しようとする法案がアイルランド下院に上程された。スウィフトはグラットン⁽²⁾、ジャクソン⁽³⁾その他の宗教関係者と教会収入削減に通ずるこの法案に反対の嘆願書を出した。この法案は結局却下されたが、アイルランド国会の宗教界への反感は収まらなかった。

1734年には牧畜業への十分の一税廃止に激しい抵抗運動が起こった。牧畜業への十分の一税は明らかにヘンリー八世の条令の中に組込まれているとスウィフトは考えていた。アイルランド下院は聖職者の反対運動に干渉し弾圧を加えた。法廷も聖職者側からの訴訟を受理しない仕末だった。

同じ頃、教会の権限を狭めようとする動きが大地主側にみられた。その最も苛酷な例はロジャー・スロップ師⁽⁴⁾の事例だった。彼は聖職録のパトロンであるジョン・ウォーラー⁽⁵⁾に屈するのを拒否したため数々の訴訟、迫害、逮捕に悩まされ1736年1月健康を害して失意のうちに死んだ。その後ロジャー・スロップの弟ロバート・スロップは国会に歎願書を出して兄がウォーラーから受けた度重なる不当な仕打を暴露し、ウォーラーは国会議員ではあるが、彼を逮捕して処罰する法的措置を考慮するよう国会に訴えた。だが、ロバート・スロップが国会に出した嘆願書は満場一致で否決された⁽⁶⁾。

こうした一連の事情がスウィフトを憤激させ長詩「^{レキオーン}軍団クラブ」を書かせたのたである。問題のウォーラーには次のような毒々しいことばを投げ

かけている。

地獄の悪鬼のようにがなり立てているあの男はだれか。
魔王か。そうではないウォーラーだ。
ハーデス卿の孫ジャックを
詩人ならいかなる詞彩をもって描きえよう。
正直者の地獄の門番よ。彼奴をもっと追い立てろ。
彼奴の面貌には地獄と人殺しの相がある。
まさしくスロップを殺害した時のように
渋面が傾く工合をみるがいい。

(137-144)

「^{レギオン}軍団クラブ」を危険を冒してダブリンで発刊しようとする者はいなかった。アイルランドの下院議員でスウィフトの生命を狙うものがあつた。身の危険を感じたスウィフトは外出するさいには供の従僕に武装させていると5月15日付のシェリンダへの手紙で語っている。このような詩稿だけにダブリンでは友人知己の間でこっそりと回し読みされた。そして、回し読みされている中に詩稿に尾びれがついて脹れ上つた。シェリダンは「^{レギオン}「軍団クラブ」の異本を各種読みました」⁽⁷⁾「だが、誓っていいますが、私は一行も挿入していません」⁽⁸⁾とスウィフトに申し開きをしている。スウィフトは「^{レギオン}「軍団クラブ」の異本は50種類⁽⁹⁾はあるだろうと知っているが、どぎつい詩稿だけにアイルランドの枢密院が著者を喚問するという噂まで流れた。

ところが、ダブリンと違ってロンドンでは1736年早々と『アイリッシュ雑録』⁽¹⁰⁾なる冊子に加えられて上梓された。発売者はドッド夫人⁽¹¹⁾という素姓不明の女性である。ダブリンでは1762、3年によくフォークナーがスウィフトの著作集に含めて発刊した。

1736年、軀の衰弱が目立ったスウィフトはペンダーヴズ夫人に勧められて一時温泉地バースでの療養を考えたが、旅中の労苦が厭わしくバース行きを思い止まった。

同年2月7日体調を崩したポープを見舞う手紙の中でスウィフトは自身の不調をうったえ、このままではいつ墓に入ることになるか分からないと

いている。事実、その頃スウィフトは目まいがひっきりなしで夜は眠れず食欲もなかった。皮膚と骨との間に1オンスの肉もないと衰弱ぶりを嘆いている。

そして、次々と友人を失った今、スウィフトはポープを失うことを恐れた。ポープに向かって「私に残されているのはあなただけです。私よりも先きには死なないでください。私が死んだ後で好きな時に死んでほしい」⁽¹²⁾ といっている。

4月22日のポープへの書信ではさらに深刻になる。「会話が全くできなくなりました。ツンボで耳が聞えなくなったせいです。これではあなたに招かれても、イングランドへ渡るのは思いもよらぬことです。痛風なら適当な時期を見計って船旅もできるのですが……私のたった一つの楽しみである乗馬も気が進まなくなりました」⁽¹³⁾ といっている。

これにたいしてポープは8月17日次のような興味深い返書を認めている。「しばらく前、あなたは年をとると口数が多くなって書くことは少なくなるといっていました、その通りだと思います……私はいたって簡潔に書くようになりました。半ヤードもある長い問合せや懇願の手紙に時折イエスカノウで答えるだけです。私がいつも2つ折りの用紙に手紙を書く相手はあなたとボーリングルック卿の2人しかいません。今日書いたものが次代につながるのは私が知っているうちでは、あなた方お2人に限られます。外は単に生きている人間というだけです。あなた方お2人のような人はどんな欠陥があろうとも尊敬をうけるに値します」⁽¹⁴⁾

さらに、同年12月30日スウィフトが70歳の年を迎えるに当って、アイルランド国民が挙ってスウィフトの誕生日をこれまで毎年祝ってきたことに言及し、ポープは次のようにいって喜んでいる。「庶民の敬意と愛情をかちとるには高い身分や素姓にまさるものがが必要です。王候といえども質の悪い頌詩とか金を払って焚かせる篝火の外にはこれといった誕生日の祝はありません。歳月があなたからなにを奪おうと、あなたの分別や徳性や慈悲心への庶民の敬意を奪い去ることはできないでしょう」⁽¹⁵⁾ このようにポープのスウィフトへの評価にはその著作においても人となりにおいても並々ならぬものがあった。

一方、シェリダンはこの時期スウィフトの健康を気づかって8項目から

なる養生訓⁽¹⁶⁾を書き送っている。

1. 適当に歩くこと。
2. 馬にはゆっくりと乗り、乗る回数を多くすること。
3. ホワイトウエー夫人には腹を立てないこと。
4. 声を無理に絞り出さないこと。
5. 下僕奴婢の失策にイライラしないこと。
6. 気持よくグラスを傾けること。
7. できるだけ勉強は控えること。
8. 陽気な相手を見つけ、一緒に過す時間を多くすること。

養生訓の3と8には注釈が必要である。ホワイトウエー夫人にはスウィフトもシェリダンも腹立たしいことがあった。ホワイトウエー夫人が最初の夫との間に儲けたセオフィラス・ハリソンが疫病なみの発疹チフスで23歳で死んだ時にはわが子を亡くしたように悲しんでホワイトウエー夫人を慰めたり、2番目の夫との間に生れたジョン・ホワイトウエーが医者になるさいには資金面の援助を惜しまなかったりしてスウィフトは彼女への配慮を怠らなかったが、時には感情をむき出しにして2人が激しくやり合う場合もあった⁽¹⁷⁾。

シェリダンは「ホワイトウエー夫人を追出して、自分の女房を代りに使うように。彼女ならあなたを大切に扱うから…ホワイトウエー夫人は気難しくてお喋りで病人には手荒い。おまけに、たいへんひねくれている」⁽¹⁸⁾と散々にこきおろしている。

養生訓第8項で陽気な相手を見つけるようにスウィフトに勧めているが、当時、陽気な相手に最も相応しいのは当のシェリダンだった。1736年スウィフトとシェリダンとの間に頻繁に手紙のやりとりがあるが、たとえば同年7月6日のスウィフトへの手紙には陽気で滑稽なシェリダンの性格が如実にうかがえておもしろい。

ここ6週間こちらには200粒の雨も降りません。

川は干上がり

空は焼けるように熱い。

いろいろの私は揚げ物にされて
 殺されそうだ。
 ああ太陽神の目をのがれて
 どこへ逃げよう。
 ベッドに寝ていると
 カササギのように、びしょ濡れになり
 豚小屋の豚なみに汗をかく。汗をかく。⁽¹⁹⁾

シェリダンは「これはスウィフトお好みのアレクサンドル格（6歩格）の詩だから、ぜひ作曲してほしい。バスとセカンド・ソプラノは私が引き受ける」⁽²⁰⁾ といっている。

シェリダンは数字をおもしろおかしく使う。この手紙の末尾でホワイトウエー夫人とホワイトウエー夫人の飼っている鶏にくれぐれもよろしくというのを、数字を上下に動かす細かな芸までみせて次のようにいっている。

Present love 967⁸94⁶⁸4⁶73405⁶⁷8⁹8⁹7324 times to my dear Mrs. Whiteway and all her chickens.⁽²¹⁾

この年シェリダンに次いでスウィフトが親しく交信しているのはチャールズ・フォードである。1736年6月22日のフォード宛の手紙でスウィフトはここ20ヶ月健康であった日は1日もなかったといいながら、「生ある限り、節制してまずまずの余生を全うしたい」⁽²²⁾ といっている。スウィフトは決して自暴自棄にはならなかった。その自制力は並のものではなかった。

だが、政治や宗教には絶望的な口吻を洩している。「私はイングランドでもアイルランドでも、存命の人間で権力者から最も憎まれた人間でしょう……だが、今となっては彼らのために盡すとか彼らをやりこめるとかする能力は全くなくなりました……私が好意をもっていた要路の人間が私を欺したことに私は腹が立ちますが失望はしません。バザーストもカータレットも私とは別の血筋の人間です。私は教会にもキリスト教にもかなり前から希望を失っております。著者の名前は忘れましたが、ある人は本の中で

キリスト教はもうあと 300 年も続かないだろうとっています。ユダヤ人がいつもいるようにキリスト教徒が絶えることはないだろうが、国教としてのキリスト教がそれ以上は続かないというのが著者のいわんとするところですが……。教会はイングランドでもアイルランドでも嫌悪の対象になっています」⁽²³⁾ とっている。

だが、ダブリンの聖パトリック大聖堂の主任司祭としての職務は忠実に履行していた。1736 年の暮もおし迫った 12 月 24 日、キルケニーのキャッスル・ダロウ卿⁽²⁴⁾への手紙では満 70 歳の年を迎える現在の生活を政界の要人との往来を通じて混迷の中に過した中年期の戯画だとスウィフトはしている。

私は今当時と同じことを小じんまりとやっております。むしろ以前よりも高い地位で首相として、時には国王として。私が国王なら、私のとこの家政婦はロバート・ウォルポールで、どっしりした老婦人の彼女は家でも隣り近所でもそう呼ばれています……私の国土は 120 軒の世帯にまたがり、その住人が私の臣下です。⁽²⁵⁾

こうして教区の住民が訴えてくる些事を取りしきるのにスウィフトは結構時間を奪われていた。

スウィフトは満 70 歳になる 1737 年頃から、とみに老齢を意識するようになる。同年 3 月 7 日のウィリアム・プルトニー⁽²⁶⁾への書信で、スウィフトは「日を重ねるごとに不健康と老齢が加わり……年齢よりは一廻り老けています」⁽²⁷⁾ といい、スウィフトがかかった医者がどれも病状を好転させることができなかったことを嘆いて次のようにしている。

アーバスノットが私の病気を理解しているように思えたたった一人の医者ですが、彼にも治せませんでした。ですが、それなりに優れた 5 人の医者を征服することはアレキサンダー大王もシーザーも意図しなかったことでしょう。⁽²⁸⁾

後半のスウィフトのことばは彼が 5 人の医者にいずれも敬服してただけに、その助言や処方を見下すに似てくったことをいっているのだろう。

スウィフトは満 70 歳に近づいても身辺の弱者への配慮は怠らなかつた。

スウィフトは若い頃のパトロンであったウィリアム・テムプルの継承者で甥のジョン・テムプル⁽²⁹⁾にステラの生涯のコンパニオンであったディングレー夫人への支援を頼んでいる。

スウィフトはこの時同時に、ジョン・テムプルに彼の叔母レイディ・ジファード⁽³⁰⁾の肖像画を贈り、ジョン・テムプルが目下当主として管理しているムア・パークの屋敷を懐かしんでいる。画家ジャーヴァスがサー・ピーター・レリー⁽³¹⁾の最上の作だと折紙をつけたレイディ・ジファードの肖像画をスウィフトがジョン・テムプルに与えたのは、その代価ならディングレー夫人の生活費の補助にかなり充当できるとスウィフトが考えたからだった。

ロンドンデリー州、コーラレイン⁽³²⁾の商工業開発がアイリッシュ・ソシアティ⁽³³⁾の肝煎りで勧められ、地価が4倍にハネ上がったことがあった。スウィフトは1737年3月、ダブリン市市会議員のジョン・バーバー⁽³⁴⁾への書翰で次のようにいっている。

これではこの惨めな国は毎年まちがいなく疲弊してゆくに違いありません……地代の高騰のため、すでに好ましくない結果が起きています。コーラレインでは借地人の多くが家を棄てました。居残った者たちは壊れかけた住居の修理もできかねています⁽³⁵⁾。

スウィフト自身は主任司祭として所有していた土地の5分の4を時価よりも安い値で貸していた。

1737年4月オルリー伯が忠実な下婢キャサリン・レイリー⁽³⁶⁾の息子エドワードをブルーコート・ホスピタル⁽³⁷⁾に入院させるため同病院の理事を長らく勤めていたスウィフトに斡旋を依頼したことがあった。ブルーコート・ホスピタルへの入院についてはダブリン市長の諒承を得る必要があった。スウィフトは時のダブリン市長ジェイムズ・サマーヴィル⁽³⁸⁾に許可をもとめたが、何度頼んでも許可が下りなかった。スウィフトは諦めず、サマーヴィルが市長職を退いてウィリアム・ウォーカー⁽³⁹⁾が市長の座に座ると、エドワードの入院についてウォーカーに更めて依頼状を出している。些細な要件でも、いったん引き受けると、スウィフトは簡単に引き退ることはなかった。

同じ頃、ダブリン大主教付きの某職員に宛た書信⁽⁴⁰⁾では、エドワード四世の治世に条令で確認されている聖パトリック大聖堂主任司祭の特権が侵害されるような場合には私は断固として抵抗するといっている。スウィフトが言及した主任司祭の特権を認めた特許状は今日でも聖パトリック大聖堂に保管されているが、スウィフトのこの手紙は大主教との軋轢を恐れたダブリン・聖ブライズ教会⁽⁴¹⁾のジェームズ・キング師⁽⁴²⁾の助言によって先方に送られることはなかった。

この頃、スウィフトはポープに向って今の健康状態ではいつ死ぬかわからないといい⁽⁴³⁾オルリー伯には、「私の今の姿は幽霊そのものです」⁽⁴⁴⁾ といっているが、間近でスウィフトを見守っていたホワイトウエー夫人は「本人はいろいろコボしているけれど、まだ、いたって元気」⁽⁴⁵⁾ といっていた。そして、上記のように主任司祭としての権威もなんとか持ちこたえていたのである。

だが、牧師館での生活は一段と重苦しくなっていた。1737年7月23日のエラスマス・ルイス宛の手紙では、「もう考えることができないので、書いても楽しくありません」⁽⁴⁶⁾ といっている。それに、スウィフトはこの頃からきまってダイニング・ルームではなく私室で、いかめしい家政婦を相手に食事をとるようになっていた。そして押し黙った空気を破るのは時折訪れる1, 2の友人か、突んざくように甲高いホワイトウエー夫人の声だった。

1737年4月スウィフトはホワイトウエー夫人に手紙で死後の処置を次のように指示している。

私の訃報を聞いたら、ただちに牧師館に出向いて、家政婦のアン・リッジウェー、⁽⁴⁷⁾ 堂守のロジャー・ケンドリック⁽⁴⁸⁾、墓堀り役のヘンリー・ランド⁽⁴⁹⁾同席の下で、キャビネットのキーをすべて受け取り、紙にくるんで封をする。次にダブリン市内に居合わす遺言執行人をできる限り数多く呼び寄せ書類整理棚を開けて遺言執行人に遺言を配る。遺言執行人は全部で9名だがその中3名はその場に居合わすようにする⁽⁵⁰⁾。

こうして、遺言に基づいた細かな始末をその後に記し、末尾に立合い人

としてアン・リッジウェーの名を記載した上、9名の遺言執行人の名を次のように挙げている。

ロバート・リンゼイ⁽⁵¹⁾

ヘンリー・シングルトン⁽⁵²⁾

デラニー師

リチャード・ヘルシャム⁽⁵³⁾

イートン・スタンナード⁽⁵⁴⁾

ロバート・グラッタン⁽⁵⁵⁾

ジョン・グラッタン⁽⁵⁶⁾

ジェームズ・ストップフォード⁽⁵⁷⁾

ジェームズ・キング⁽⁵⁸⁾

ロバート・リンゼイは1709年アイルランドの法曹界に入り、1721年から1722年にかけて聖パトリック大聖堂法律顧問、1733年にはアイルランド民事訴訟担当判事になった。スウィフトは「ドレイピア書簡」執筆中、リンゼイから法律上の助言を得ていた。

ヘンリー・シングルトンはアイルランドの主任上級法廷弁護士で、後、民事訴訟主席判事になる。

リチャード・ヘルシャムはスウィフトがかかっていた医者の一入である。ダブリン・トリニティ・カレッジのフェローで医学と論理学の教授でもあった。デラニーとシェリダンを通じてスウィフトと面識をもつようになった。アイルランド総督を勤めたドーセット侯にヘルシャムの診療を受けるようアーバスノットが勧めたほど有能な医師だった。

イートン・スタンナードはダブリン市裁判所判事だった。

ロバート・グラッタンとジョン・グラッタンはダブリン・トリニティ・カレッジのフェローだったパトリック・グラッタンの7人の子息の4番目と5番目で、7人とも揃って聖職者、医者、ダブリン市長等の要職についた。ロバートは当時、聖アンドリュース教会の牧師でジョンは1719年から20年にかけてフィングラス⁽⁵⁹⁾の牧師だった。7人の兄弟すべてスウィフトの友人で、中2人がスウィフトの遺言執行人になった。

ジェームズ・ストップフォードは当時フィングラスの教区牧師で、後ク

ロイン⁽⁶⁰⁾の主教になった。

ジェイムズ・キングは前述の通りダブリンの聖ブライズ教会の教区牧師で、聖パトリック大聖堂の参事会員でもあった。

ところで、1737年から1738年にかけて、スウィフトは牧師館にあって精々、庭先に出るくらいで数ヶ月間一步も戸外に出ないことがあった。1738年1月、ほぼ30年関わりをもったロンドンの印刷業者ジョン・バーバーへの手紙の中で、「今の私は昔の影法師に過ぎません。3年ぐらい前からそんな風を感じています」⁽⁶¹⁾ といっている。だが、諷刺詩への自負はあった。バーバーに向って、「私にはその方面の才能が多少は(いや、かなり)あった」⁽⁶²⁾ といっている。

バーバーはヤコブ・トンソン⁽⁶³⁾と共にマシュー・ライヤーの500ページに及ぶ詩集⁽⁶⁴⁾の刊行に関与したが、スウィフトの詩才を評価していたかどうかはわからない。バーバーとスウィフトとの仲は1714年「ホイッグの公共精神」⁽⁶⁵⁾の印刷を手がけてバーバーが投獄された頃から続いていた。

この時期ピルキントン夫婦の間に悶着が起きた。妻が浮気をして夫が離婚の訴訟を起こしたのである。ところが、夫は姦淫罪で訴え出たものの本気で離婚する気はない。妻は妻で浮気をしながら扶養手当を要求する始末。あきれたスウィフトは機知と徳行とユーモアの点で夫婦を讃えてスウィフトに紹介したデラニー師を説教はうまいが人を推薦するのはたいへん不得手な男だといってくさしている。

1738年スウィフトに新しい知己ができた。キャサリン・リチャードソン⁽⁶⁶⁾である。彼女は牧師の娘で、スウィフトに鮭を送ったロンドンデリー州コーラレイン近傍サマーシートの地主ウィリアム・リチャードソンの姪に当る。兩人ともスウィフトのファンでウィリアムは毎年シーズンになるとスウィフトに鮭を送り、キャサリンはスウィフトにシャツを半ダース送ったりしている。スウィフトは鮭は飽食気味だったが、会話が上手で身だしなみがよく、比較的上層のアイルランド女性には珍しく家事が得意なキャサリンはスウィフトのお気に入りだった。ホワイトウエー夫人のアイデアでスウィフトの名前を刻みその頭髪を細工しておさめたダイヤモンド・リングを彼はキャサリンに贈っている。

この年もスウィフトは弱者への思いやりを失っていない。ベルキャム

ブ⁽⁶⁷⁾のロバート・グラットン師宅へ食事の招待をうけて馬で出かけた時スウィフトは3ヶ月前犬に噛まれた傷が治らずビッコをひいている男の子に出あった。その男の子は農夫の下働きだが怪我で働けないため首になりかけていた。男の子の話をきいて憐れに思ったスウィフトはドクター・スティーヴンズ・ホスピタルへの入院を取計ってくれるよう3月14日ベルキャンプからジョン・ニコルス⁽⁶⁸⁾へ書状を送っている。ジョン・ニコルスはアイルランドの軍医総監トーマス・プロビー⁽⁶⁹⁾の娘と結婚し、当時ドクター・スティーヴンズ・ホスピタルに勤務する外科医だった。

1738年7月13日、スウィフトはジョージ・フォークナーに手紙を出して未回収になっている貸出し額を回収するための文面を活字にしてもらえよう依頼している。スウィフトの会計簿によると、1736年4月、金利5%から6%で貸出して未回収になっている額が7,500ポンド⁽⁷⁰⁾あった。どんな形で活字にするかはフォークナーに一任しているが、精神病院向けの土地購入という慈善目的を明らかにした上で第三者を通して返却をもとめるのだから、三十八年七月の時点では、まだ相当な額が未回収だったのであろう。同じ手紙の中でスウィフトは2,000ポンドなら金利5%で今でも貸出すことができるが、この元本もスウィフトの死後は遺言執行人に一任して病院向けの土地購入資金に当てるといっている。

1738年7月ジョン・バーバーはスウィフトにポーリンブルックとポープの近況を伝えている。ポーリンブルックはフランスにあってアン女王治世当時の歴史を執筆中であり、ポープは風邪気味だが至極元気で旺盛な執筆活動に携っていた。1738年前半はとりわけ活発で、「ダイアログⅠ」⁽⁷¹⁾「万人の祈り」⁽⁷²⁾「ダイアログⅡ」⁽⁷³⁾を続けざまに発表した。スウィフトはもはやロンドンとは没交渉になっていたので、作品中の登場人物がだれを指すか分らなかったが、「ダイアログⅡ」はスウィフトのお気に入りの作品だった。

ポープが保存の上出版を心がけていたスウィフトとの往復書簡については、8月8日のポープへの書信の中で、

ここ20年以上にわたってあなたが私にくださったお手紙は密封して束にしホワイトウエー夫人に渡しておきます……彼女が預ったこれ

らの手紙は私の死後、あなたの元に送り届けることにします⁽⁷⁴⁾。

といている。

同じく8月、ホワイトウエー夫人はウィリアム・リチャードソンへの手紙で、スウィフトは耳が極端に遠くなったが、まだまだ元気だといっている。事実、スウィフトはこの時期も健康には留意していた。スウィフトに健康保持のためロバのミルクを勧めていたジョン・バーバーが喘息で苦しんでいるのに同情しながら、スウィフトは自分が喘息にかからずにすんでいるのは節制と運動のおかげだといっている。スウィフトは70歳を越えても一日平均4マイルは歩いていた。日によっては6マイル、8マイル、10マイル歩いたが決して無理はしなかった。雨の日は相変らず階段を昇り降りしたり、室内を歩き廻ったりして同じ距離を歩くように心がけていた。

この頃は牧師館でのホワイトウエー夫人の役割は日増しに大きくなっていった。スウィフトはポーブに向って、「たいへん賢明な私の従妹で、牧師館を訪れる縁者で我慢できるのは彼女だけです」⁽⁷⁵⁾ といっている。だが、ホワイトウエー夫人は胆嚢障害で苦しんでいた上に、スウィフトに用向きを伝えるさいには相手に聞えるように耳元で大声でどなるので疲労も余計に加わった。

ホワイトウエー夫人はスウィフトはまだまだ元気だと他人にはいっていたが、スウィフトはもう長くはないと内心では感じていた。ホワイトウエー夫人はスウィフトの寿命を短くするのは目まいとツンボの業病の外に、スウィフトがいくら尽しても改善されないアイルランドの惨状だと考えていた。スウィフトはローマの護民官でカエサルに抵抗して自殺して果てた小カトーのように、アイルランドの愛国者なので、自身がアイルランドにとって無用と悟れば生きてはられないだろうとホワイトウエー夫人はリチャードソンに語っている。⁽⁷⁶⁾

1738年10月、アイルランドでスウィフトが最も親しかったシェリダンが死んだ。シェリダンは牧師館での常連の客で、シェリダン専用の部屋が牧師館にとっておかれるほどだった。金銭問題が2人の間に溝を作った。約700ポンド近いスウィフトからの借金が返済されないまま滞っていた。スウィフトはシェリダンが死ぬ暫く前に、ホワイトウエー夫人を通じて牧

師館への出入りを禁じた。報せをうけて20年以上にわたる交友が途絶えたのを知るとシェリダンは電撃をうけたようなショックを感じた。彼は自宅を出ると、それっきり戻らなかった。シェリダンが死んだのはそれから数週間後のことだった。

1738年シェリダンの死後、スウィフトは「トーマス・シェリダン師の人となり」⁽⁷⁷⁾ という一文を草している。この中ではシェリダンの借財のことには触れず、次のようにその人となりを讃えている。

トーマス・シェリダン師は1738年10月10日午後3時、ラスファーマム⁽⁷⁸⁾で死んだ。死因は水腫と喘息だった。彼はイングランドおよびアイルランドで、いやおそらくはヨーロッパで青年の訓育にかけては間違いなく最良の教師であった……彼には詩才があった。彼が書く詩はウイットとユーモアに溢れていた……彼はギリシャ、ローマ、イタリア、スペイン、フランス、イギリス等の作家による数巻におよぶ滑稽譚を蒐集していた……彼はフランス人のいういわゆる Dupe (お人よし) で世事には全く無知だった。彼の輝かしい美質は教師としての資質だった。生徒の人相見に長けていて一目でその特色を捉えた。生徒はシェリダンを愛しシェリダンを恐れた……シェリダンの生徒たちはその数と勉学において他校の生徒を遙かに凌いでいた。⁽⁷⁹⁾

シェリダンの死後約3ヶ月経ってスウィフトが71歳の誕生日を迎える3日前の1738年11月27日、彼はホワイトウエー夫人に手紙を出して「私は誕生日を好まない。当日の朝は「ヨブ記」の第3章を読みます」⁽⁸⁰⁾ といっている。「ヨブ記」第3章は苦難の人ヨブが自身の誕生の日を呪い次のようなことばで終っている。

私の畏怖するものがわが身を襲い、
私の恐るるものがわが身におよぶ。
私には寛ろぎも平安も休息もない。
ただ悩みだけがやってくる。

だが、スウィフトの想いとは裏腹にスウィフトの誕生日を祝う者は多

かった。オルリー伯夫人はスウィフトに向って11月30日は聖アンドリュー祭にあたるが、私たちはスコットランドの守護神、聖アンドリューを祝うのではなく、あなたの生誕を祝いその長寿を願うのだとっている。だが、これは全くスウィフトの望むところではなかった。

1739年6月スウィフトはホワイトウエー夫人に代筆させてポーブへの手紙を書いている。知人にスウィフトはまだまだ元気だといっていたホワイトウエー夫人も、この時にはもう匙を投じている。手紙の書き出しで、「酷いツンボと目まいが折り重なって重症です」⁽⁸¹⁾ とポーブに打ち明けている。

すべて短信だが、1739年末から1740年春先きにかけてスウィフトは頻繁にホワイトウエー夫人に手紙を書いている。この時期アイルランドでは記録的な寒気が7週間も続いた。1739年12月31日の書信では「アイルランドの今日の寒さはロシアの寒さと変わらない。いや、ロシアを上廻るかも知れない」⁽⁸²⁾ といっている。リューマチで牧師館に出来ないホワイトウエー夫人の体調を気遣っている。1740年4月の手紙では、「私はあなたより20歳年上ですが、健康を害している点では同じです。私はここのところ2日間はなほだ惨めで、考えおよばないような拷問を受けている感じです。昨夜は一晩中ファラリスの真鍮の雄牛像⁽⁸³⁾の中に押し込められたような衝撃を受けました。私は8時間から9時間大声で喚き続けました。手紙を書いている今でも軀を動かすと激痛を感じます。でも、今の痛みは昨夜から今朝にかけての痛みと較べれば千分の一の激しさもありませんが」⁽⁸⁴⁾ といっている。

スウィフトはこの4日後の5月3日、最後の遺言を認めている。今日、その全文が残っている。冒頭でスウィフトは、軀は衰弱してはいるが精神が健全な現在、最後の遺書を作成しこれまでの遺書はすべて破棄するといっている。

遺書は前書と22項目から成っている。各項目に番号はついていない。前書にはこう書いてある。

私の死後、私の靈魂は神に送られ私の肉体は大地にもどる。私の遺体は死後三日経過してから、できるだけしめやかに、聖パトリック大

聖堂南面大側廊にあるナルシサス・マーシュ主席司教⁽⁸⁵⁾の記念碑に隣接する石柱の下に、夜半の12時に埋葬していただきたい。そのさい、地上7フィートの壁面に、深刻りで濃い金箔の施してある大文字にて次の文言を列ねた黒大理石の銘板をかけてほしい。

当大聖堂主任司祭、神学博士ジョナサン・スウィフトの遺体ここに安置さる。激烈なる怒りがもはやかの心臓を引き裂くこともない。この地を離るる旅人よ、できうべくんば一途に自由を擁護したかの人に倣え。

前書に続く22項目の中、最初の項目が最も長い。

ここでは、ステラのコムパニオンであったレベッカ・ディングレイに20ポンドの年金を年2回の均等分割で与えること。

ドクター・スティーヴンズ・ホスピタルの近傍かダブリンの市内もしくはその周辺に土地を購入して精神病院を建設し、病院名は聖パトリック病院とすること。

病院関係者の給与は病院の年間収益の5分の1を超えないようにすることなどが書いてある。

ホワイトウエー夫人には牧師館に程近いケヴィンズ通りと、寺男のヘンリー・ランドが住まう牧師館通りの借家の権利、300ポンドの金子、7個ある中ホワイトウエー夫人の好きな4個の金の指輪、黄色いべっ甲の嗅ぎ煙草入れ等を遺し、金子300ポンドは現金もしくは手形でスウィフトの死後直ちに与えるようにいっている。

ブレント夫人の娘でスウィフトが「私の家族の一員」とまでいっている家政婦のリッジウエー夫人には2軒の家作の権利と100ポンドの金それにホワイトウエー夫人に与えた4ヶを除く3ヶの指輪を与えている。

馬はすべて馬具と一緒に、ダブリンから数マイルのサントリー⁽⁸⁶⁾の教区牧師ジョン・ジャクソンに⁽⁸⁷⁾に贈っている。ジャクソンの父も祖父も同じサントリーの教区牧師で、同じく聖職にあったジョンの兄ダニエルの巨大な鼻はスウィフトの友人間でしばしば笑いを誘った。

ポープには肖像画家クリスチャン・ズィンク⁽⁸⁸⁾の描いたオックスフォード伯ロバートの肖像画を遺している。ポーリンブルックへの言及はない。

その他ジェイムズ・ストップフォード、フランシス・ウィルソン⁽⁸⁹⁾、ジョン・ウォロールといった知人にそれぞれ、ヴァンダイクの描いたチャールズ一世の肖像画とか2折版の3巻からなるプラトンの著作集にクラレンドン⁽⁹⁰⁾の同じく2折版の3巻からなる歴史書、それに、スウィフト愛用のビーヴァー（海狸）ハットなどを与えている。

このスウィフトの遺言は1745年11月ロンドンのオールドキャッスル⁽⁹¹⁾社から6ペンスのパンフレットの形で上梓され、翌年スウィフトの著作集に収められた。

注

- (1) *A Character, Panegyric, and Description of the Legion Club* (1736).
- (2) Grattan, Robert (C. 1678–C. 1741).
ダブリンの ST. Bride's 教会の参事会員だった。
- (3) Jackson, John (d. 1751).
Santry の教区牧師。
(2)については1737年スウィフトが指名した9名の遺言執行人のところで
(3)については1740年のスウィフトの遺言で更めて触れる。
- (4) Throp, Roger (d. 1736).
Limerick 郡, Kilcorman の牧師。
- (5) Waller, John. 生没年末詳。
Limerick 郡 Castletown の出身で, Doneraile 選出の下院議院。陸軍中佐。
- (6) 本件へのスウィフトの介入の範囲は不明だが, 弟の Robert Throp は1739年12月9日, スウィフトへの手紙で謝意を表している。
- (7) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol IV, P. 495.
- (8) *Ibid.*, P. 497.
- (9) *Ibid.*, P. 501.
- (10) *An Irish Miscellany*.
- (11) Mrs. Dod. 生没年末詳。
- (12) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, P. 457.
- (13) *Ibid.*, PP. 476–477.
- (14) *Ibid.*, P. 526.
- (15) *Ibid.*, P. 558.
- (16) *Ibid.*, P. 473–474.
Rules of Regimen.
- (17) *Ibid.*, P. 487.
- (18) *Ibid.*, P. 485.

- (19) (20) Ibid., P. 513.
- (21) Ibid., P. 515.
- (22) Ibid., P. 505.
- (23) Ibid., PP. 504–505.
- (24) Lord Castle-Durrow, William Flower (d. 1746).
彼の母親が若い頃のスウィフトのパトロン William Temple の姪だった。
1733年男爵に叙せられた。
- (25) Op. cit., P. 555.
- (26) Pulteney, Sir William (1684–1764).
政治家。1726年ウォルポールと袂を別って、ボーリンブルックと提携し、
The Craftsman の出版に尽力した。1742年 Earl of Bath になる。
- (27) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol V, PP. 7–8.
- (28) Ibid., P. 7.
- (29) Temple, John (c. 1680–1752).
- (30) Giffard, Martha (1638–1722)
Sir William Temple の妹。
- (31) Lely, Sir Peter (1610–1680).
1641年以降イングランドに居住したオランダ生れの肖像画家。最初、歴史画
と自然の風物を描いたが、後、肖像画に移った。
- (32) Coleraine, co. Londonderry.
ダブリンから109マイル。
- (33) the Irish Society.
- (34) Barber John (1675–1741).
- (35) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, 18–19.
- (36) Reyley, Catharine. 生歿年末詳。
- (37) the Blue-Coat Hospital.
- (38) Somervilles, Sir James
- (39) Walker, William. (38)(39)生歿年末詳。
- (40) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, P. 33.
- (41) St. Bride's Church, Dublin.
- (42) King, James (c. 1699–1759).
- (43) Ibid., P. 59.
- (44) Ibid., P. 77.
- (45) Ibid., P. 54.
- (46) Ibid., P. 64.
- (47) Ridgeway, Anne. 既出。『スウィフトの生涯』XII, P. 98.
- (48) Kendrich. Roger.
- (49) Land, Henry. (48) (49) 生歿年末詳。

- (50) Ibid., PP. 34-35.
- (51) Lyndsay, Robert. 生歿年末詳。
- (52) Singleton, Henry (c. 1682-1759).
- (53) Helsham, Richard (c. 1683-1738).
- (54) Stannard, Eaton (c. 1685-1755).
- (55) Grattan, Robert (c. 1678-c. 1741).
- (56) Grattan, John (d. 1754).
- (57) Stopford, James (c. 1697-1759).
- (58) King, James cf. (42).
- (59) Finglas.
- (60) Cloyne.
- (61) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, P. 85.
- (62) Ibid., P. 86.
- (63) Tonson, Jacob (c. 1656-1736). 出版業者。
 他に、ドライデン、アディソン、ポープ等の著作を出版した。スウィフトがアディソンやスティールに会ったのは Strand 街にあったトンソンの店であった。
- (64) Matthew Prior, *Poems on Several Occasions* (1718).
- (65) cf. 「スウィフトの生涯」 VII, PP. 8-9.
- (66) Richardson, Katharine, 生歿年末詳。彼女は Summerseat の地主である叔父 William Richardson と一緒に暮していた。
- (67) Belcamp.
- (68) Nichols, John (d. 1767).
- (69) Proby, Thomas (1665-1729).
- (70) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, P. 112.
- (71) *Dialogue I* (1738).
- (72) *The Universal Prayer* (1738).
- (73) *Dialogue II* (1738).
- (74) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, P. 120.
- (75) Ibid., P. 120.
- (76) Ibid., P. 122.
- (77) *Character of Doctor Sheridan* (1738).
The Prose Writings of Jonathan Swift Vol. V, PP. 216-218.
- (78) Rathfarnam.
- (79) Op. cit., P. 216.
- (80) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, P. 128.
- (81) Ibid., P. 159.
- (82) Ibid., P. 173.

(83) Phalaris's brazen bull.

古代シシリーの暴君ファラリスは牡牛の形をした拷問器具の中に罪人を押し込め焙り殺したといわれている。cf. 「スウィフトの生涯」IV, P. 6.

(84) Op. cit., P. 183.

(85) Marsh, Narcissus (1638-1713).

(86) Santry.

(87) Jackson, John (d. 1751).

(88) Zincke, Christian (1685-1767).

(89) Wilson, Francis (b. c. 1695).

(90) Clarendon, Edward Hyde, 1st Earl of (1609-1674).

政治家。歴史家。チャールズ2世の下で大法官を勤めた。晩年は上院で弾劾されてフランスへ逃亡、6年間流罪生活を送りルーアンで死んだ。

著書; 「内乱史」 *The True Historical Narrative of the Rebellion and Civil Wars in England (1702-1704)*.

この印税をオックスフォード大学に寄附して、*the Clarendon Press* (オックスフォード大学出版局) を誕生させた。

(91) Oldcastle.

主要参考文献

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).

Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D. D.* (Edinburgh, 1824).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).